

## 第10回識字・日本語学習研究集会（全体会） 概要

2024年9月21日13:00～

大阪教育大学天王寺キャンパス 西館ホール他

テーマ 「識字・日本語学習と夜間中学校から学んで」

参加者：106名

### <提案：岡田耕治>

第10回識字・日本語学習研究集会にご参加いただき、感謝申し上げます。昨年の第9回研究集会で生じた事象を踏まえ、はじめに私からみなさんに6つのお願いを申し上げます。まずはじめに「聴く」ということについて、お互いに聴くことの力を発揮できるようにしたいと思います。

次に、「発言」ということで、おかしいと思ったら、「ちょっと待って」というふうに止めて、発言をしていただきたい。聴く力を発揮して、安心の場だから遠慮なく発言できる、そのような場を作りたいと思っている。

その上で大事にしたいのは「自分ごと」ということ。識字・日本語の学びにおいて、人権の問題、差別の問題というのは自分の問題であるという受け止め方ができることをベースにしたい。そして、「プライバシー」ということについて、全体会とか分科会では、自分のことを発表されることも多いと思う。自分が感じてきたことを発表されることも多いと思うので、それらのことはそれぞれの会場に置いて帰って欲しい。

「無理しない」については、今日はお互いに学びのために集まってきたのだが、自分のことをいうのはちょっとしんどいなあと思ったら無理なさらず、またいつか発表をしていただく機会があると思う。この6つのことを冒頭、私からお願いしたい。

それでは、4名の方が皆さんのためにサムルノリの演奏をしてくださる。今日のために、暑い中集まって練習したと聞いている。韓進鏞さんと柏木ドリス優真さんには、なぜこういう演奏を皆さんにお届けするかという意見発表もしてくださる。では4名の方に登場していただく。

### <意見発表>

・最初に柏木 ドリス 優真さんが、自身が日系アメリカ人4世であることと、なぜ、この演奏をするようになったのかを説明するために、自らの来歴を語った。その上で、自分が学びの選択肢としてのバイリンガリズムというのを研究している。学ぶということの行為の中に選択肢としてあらゆる言語が含まれていいというのが柏木さんの立場の考え方であること。だから、日本語を学ぶすべての人が学ぶ機会というのが、これからも失われていかないように、それが当たり前のこととして、この大阪に、教育大学に根強く残っていくことを祈って、本日の演奏をさせていただくと語った。また、共に演奏する夫の朴良平さんと子どもの柏木 ズザナ 貴蓮さんの紹介があった。共演してくれる李輔淳さんの紹介もあった。

### <サムルノリ演奏>

演奏者：韓進鏞さん、柏木ドリス優真さん、朴良平さん、李輔淳さん、



### <学生発表：鈴木隆生、張皓東、高橋龍人>

3人の発表は、しきじ・にほんご天王寺のボランティア活動を通じて初めて年齢や人生経験が異なる人たちと深く交流する機会を得たこと。この経験で出会った学習者の方々は、すでに日本で生活するための日本語力を持っているが、それでもなお学び続ける姿勢に非常に感銘を受けた。彼らの努力と学びに対する情熱は、学生にとって、とても刺激となって、学びに対する自分の姿勢を見直す良いきっかけになったという内容であった。また、3人とも、今後もしきじ・にほんご天王寺が活気あふれる交流の場として存続し続けることを強く願うという意見でしめくくった。

### <学生感想報告：池上英明>

大阪教育大学の池上英明特任教授からは、地域連携・人権フィールド入門という講義を受講する学生の様子や感想の紹介があった。講義では、しきじ・にほんご天王寺を含む大阪府内の識字学級や夜間中学校へのフィールドワークを通して学んでいるが、しきじ・にほんご天王寺に参加した学生から、自分もボランティアがしたい、できれば識字教室とか子ども食堂とか、学習支援、こういった活動でボランティアができないかという相談があったことなど、互いの人権を尊重し合う学びについての、学生たちの前向きな感想が読み上げられた。

### <意見発表：韓進鏞>

サムルノリの演奏をしてくれた韓進鏞さんは、生まれが日本、在日韓国の3世で、大阪教育大学大学院の高度教育支援開発専攻で、地域教育、芸術支援人材、音楽を専攻している学生。識字成人基礎教育に興味を持ち、岡田先生の授業を受講し、その中でしきじ・にほんご天王寺の見学や、東生野中学校の夜間学級の見学など、多様な学習機会を得たこと。その経験を通して、次の3つのことを学んだと発表した。①様々なバックグラウンドを持つ人々と共に学び、協調性を身につけることの大切さ。②夜間中学校の生徒たちの学習意欲に触れ、人権教育の重要性を深く認識。③しきじ・にほんご天王寺教室の活動を通して、学習者やボランティアの皆さんに音楽を通して貢献することの喜びを実感。今後、

韓さんは、大学院で学んだことを活かし、地域に音楽を通して貢献したいと考えている。しきじ・にほんご・天王寺教室は地域に開かれた大学として、地域教育に貢献する活動であることから、教員を目指す学生も参加できる仕組み作りを目指したいと述べた。さらに、これから教員になる学生さんたちのためにも、大阪教育大学の天王寺キャンパスのしきじ・にほんご天王寺教室は継続して実施し、私たちも関わっていききたいと意見表明した。

#### <発表へのコメント：出相泰裕>

私は大学院教育学研究科の主任をしており、韓さん、柏木さんは私の授業を受講している学生である。私は生涯教育学が専門で、学部の方では社会教育主事や社会教育士の資格等を出す授業を担当している。ここ数十年、文科省により大学改革が絶え間なく進められてきているが、大学は教職員とも非常にしんどい状況にある。お金がないという状況の中で、選択と集中ということで優先順位をつけて、私が担当する社会教育をはじめ、色々なことを縮小せざるを得ない状況になっている。

読み書き・言葉の学習は、個人の能力を高め、社会参加を促し、所属意識やアイデンティティを育む上で不可欠である。大阪教育大学において、識字・日本語に関する授業が不足している現状に問題意識を持ち、授業の開講を検討したが、実現に至らなかった経緯がある。識字・日本語に関わる学び直しは、社会の多様性を支える上で重要な役割を果たしており、大阪市においてもその必要性が高まっている。

今、学校だけでは対応できない課題を解決するためには、地域と学校が連携し、子どもの学びを支援していくことが重要。社会教育、特に識字・日本語教育は、地域住民の能力向上に貢献し、地域社会の発展を促す上で重要な役割を担う。今回の研究大会を通じて、識字・日本語教育の現状と課題を共有し、参加者とともに今後のあり方について考えていく機会となることを期待する。

#### <会場参加者の意見>

しきじ・にほんご天王寺教室の閉鎖と、識字・日本語に関する研究集会の終了が決まったことに、とても悔しいと思っている。この教室や研究集会が、様々な背景を持つ人々が学び、成長する場であり、大学と地域が連携して人権教育や社会教育を進める上で重要な役割を果たしてきた。特に、教室で出会った学生たちの成長や、地域住民との協働によって築き上げてきた成果を考えると、これを閉じることは大きな損失だ。この状況を打開するために、様々な方々と協力し、知恵を出し合い、これらの取り組みを継続するための方法を考えていければいいなと思っている。

## 第10回識字・日本語学習研究集会（分科会） 概要

### 〈第1分科会〉

テーマ 「学習者の思いを出発点として」

参加者：28名

1) 豊中第4中学校夜間学級の竹原さんから、作文の発表があった。発表の後、竹原さんが夜間中学で生き生きと学んでいること、アルバイトの時に、様々な人との交流がされているという付け加えがあった。続いて、東大阪意岐部中学校夜間学校のスラジュさんから作文の発表があった。発表の後、スラジュさんは高校受験のために頑張っておられるという付け加えがあった。なぜ日本を選んだのかという質問に対して、先に父母が日本に来ていたので、この国に来ることになったという返答があった。

2) 識字学級からは、住吉輪読会の穂原さんの作文発表があった。発表のあと、住吉輪読会では、日本の方も中国の方も、一生懸命に学んでいることの紹介があった。また木本さんからは、穂原さんが今回自分から頑張って発表することになった頑張りについて紹介があった。続いて、学習者とパートナーが関係性をどう作っていったらいいのかについて意見交換が行われた。

続いて、住吉輪読会の西岡さんから作文の発表があった。発表の後、西岡さんは大変勇気のある人で、自分のことを「認知症」と伝えているけれども、こういうしっかりした文章を書ける方であると報告された。住吉輪読会では、中国から来られた方も、日本に在住している方も、年齢を重ねながら頑張っていること。お互いに自分の話を聞き合える関係が作られているという発言があった。

3) 全体として、夜間中学においても、識字学級においても、学習者が一つずつ読み書き言葉の学習を達成していく、そういう積み重ねを感じることができたこと。夜間中学校に入学することによって、今までの生活がガラッと変わって、学びを中心にした生活になったという意見発表があった。竹原さんの「読みたい、書きたい、計算したい」という言葉が紹介された。学ぶということは生きること、そして生き立ちを書くということは、自分を見つめ、家族を見つめ、また社会のおかしさにも気づいていくことになる。書くことを通して、様々な気づきがあるんだという意見発表があった。識字というのは、奪われた文字を取り戻す場だと言われているけれども、一文字一文字に思いを込めて、綴っていくという学びをこれからも続けたい。そのような意見交換がなされた。

4) 最後に、竹原さんからは、「みなさん、聞いてくれてありがとう」とお礼の言葉があり、「私が書いた作文のことを思い出してほしい」と締めくくられた。スラジュさんからは、皆さんの前で話す事は恥ずかしかったけれども、実際に発表することができてよかった。ネパールはスポーツを続けていくのは難しいけれども、日本では続けていく環境があるので、頑張りたいというふうに締められた。

穂原さんからは、母から勉強しなさいと言われてきたけれども、今はその母の言葉通り、仲間と共に勉強できることに感謝している、と。西岡さんからは、住吉連続会はいろんなことを受け止めてくれる、助けてくれる優しく素晴らしい場所だという締めくくりがあった。

### 〈第2分科会〉

テーマ 「しきじ・にほんご天王寺は宝」

参加者：21名

大阪教育大学が運営する、よみかき・ことばの学習の場である「しきじ・にほんご天王寺」。そこに集う学習者やボランティアのみなさんが、この8年間、どのようなことを大切にして学び続けてきたのか、それぞれの思いを発表した。その後、参加者も交えて、4つのグループに分かれ、よみかき・ことばの学習をする上で、大切にしていきたいことを話し合った。最後に、大阪教育大学への要望として、次のような文章を共同で作成し、このメッセージを大学に届けることになった。

メッセージ

「私は、80歳を越えたので、しきじがなくなったら、行くところがありません。教育大学なのに、私達学ぶ者を切り捨てるのですか」。学ぶ人の居場所を奪わないで下さい。教育を受ける権利は人権。教育難民を出さないよう、大学として社会に貢献して下さい。しきじ・にほんご天王寺は宝です。学ぶことは楽しいこと、自ら学ぶことの大切さを感じています。みんなの学ぶ場所、心のよりどころ、コミュニティの場所を残して下さい。学び合い、共に生きる未来の大阪のために、しきじ・にほんご天王寺の存続を求めます。

### 〈第3分科会〉

テーマ 「これからの教室運営に活かす人権ディフェンダーとは」

参加者：19名

#### ①本分科会の趣旨と内容の説明（司会者 森さん、菅原さんより）

差別事象や普段の教室や職場で出てくるこまった場面をもとに、ことばだけに頼らず、演劇的な手法などでその解決策を探る。前半は1つの事例についてのグループでの話し合い、後半はグループごとに困難場面とそれが解決した場面を静止状態の劇で表現し、その2つの場面をつなぐ経過を演劇で上演する。

#### ②グループ分けと自己紹介

アメを配布し、アメの種類ごとに4人ずつのグループに分かれる。グループごとに一人2分の自己紹介後、役割分担（司会進行、報告記録、もりあげ2人）

#### ③用語が難解であるという参加者の指摘と質問に答える形で「人権ディフェンダー」について説明

国連でつかわれている言葉で、「人権を守り育てる人」という意味。守るということにとどまらずに広げるためにがんばる人をイメージしている。

### ③香川県のホテルでの事例（しつこく在留カード提示を求められ…）についてグループ討議と発表

- 話し合いのポイント
1. どこにどのような問題がありますか？
  2. どう解決すればいいと思いますか？

#### ・ゆずグループ

1. 名前で旅行者と決めつけていること。 しつこい。マニュアルを守り通そうとしたのかも…。

2. フロントの教育をホテルがしっかりとすべき（研修）。現在はかわったのか？

#### ・くろあめグループ

1. 趙博さんの話を思い出した。名前で判断することが問題。指示はどこから出ているのか？確認されること自体が怖いし、問題。疑問に思う人が少ない。

2. 別の事例で顔写真入りの文書を作ったこともある。「やっぱり自分を証明する文書は自分を守るために必要」という意見を聞いたことがあるが…。

#### ・うめグループ

1. なぜこんなにしつこくパスポートを出せといわれるのか、在日外国人への偏見がある。マニュアルがあるならそれも問題。「もう慣れました」と思わされることや「傷つき疲れる」という状況があることが問題。

2. 法律を変える。マニュアルの出所を確かめ、問うていく。親しい人に伝える。友人がフロントで言ってくれたらよかったのに…。

#### ・なちぐるグループ

1. 名前で外国人ときめつけて確認するのか。日本人には確認しないのに。拒否してもしつこく求めた。「出せ」という権限がどこにあるのか。求めることができるのは官憲のみではないのか。フロント係は本人の判断でいったのかマニュアルがあったのか。

#### 2. フロント系の研修や市民の学習が必要

### ④香川県の見解やホテル従業員の証言、香川県警の対応などをまとめたプリントを参考資料として配布、事例の顛末を説明。

この事例に対しての友人の対応…「私の友だちに何してくれるねん！」という怒りと思いをもち、ホテルに行き、ホテル側と話をした。◎どこが問題なのかを見抜く ◎まず行動 ◎背景たしかめ ◎役所に要求 ◎他の人にも確認

### ⑤各グループの報告と資料プリントを参考に グループごとに再度話し合いを行い、数名が思いを発表。

・フロント係の人は、やっと仕事に就くことができた在日外国人の人だったかもしれない。マニュアル通りにやろうとした被害者かもしれない。

・友人が言ってくれればよかったというが、そこにたどり着けない人もたどり着こうともしない人もいる。

・上から言われたことはやったほうがいいのかという人が多くなり、抗うことなく、忖度してしまう。権力を問う姿勢が大事！

・教員は生徒に語る時、「自分は権力の側にいる人間だ、自分のバックに文科省がいる」ということを意識しておくことが基本である。

(10分休憩)

⑥識字・日本語学習での問題状況に対応するためのロールプレイを行うために、提示されたA～Gの7つの場面設定から各グループがロールプレイを行う場面を1つ選択。

くろあめグループ…A

ある識字・日本語学習ボランティアの集まった会議でのこと。ある参加者が、次のような文書を出しました。「外国人が増えると、治安が悪化するし、日本文化が潰されていく。労働力不足のおりから、外国人受け入れはやむを得ない。だから、外国人街をつくらせるのではなく、日本社会に溶け込めるように環境整備をしたり、日本語指導したりすることが必要だ。」(あなたがこの会議の参加者だったら、どうしますか。)

なちぐろグループ、うめグループ…B

ある教室でのこと。ベトナムから来た学習者が次のように言いました。「住んでいるマンションで、ゴミ出しが問題になりました。分別を間違っている人がいたのです。となりの人がわたしの部屋にやってきて『このマンションで外国人はあなただけだ。ゴミ出しをきちんと出来ていないのはあなただろう。出来ないんだったら、国に帰りなさい。』と言いました。でも、わたしは、ベトナムにいるときからごみの分別については勉強して知っていました。だからきちんとだしているんです。(聞いていたあなたはどうしますか。)

ゆずグループ…C

ある教室でのこと。学習者がボランティアに言いました。「私がこの教室に来ていることは、誰にも言っていない。知っているのは家族だけです。だから、夕方に出かけるとき、近所の人に『何処に行くんですか?』と尋ねられました。『ちょっとそこまで』と行ってごまかしたのですが、何度もこんな方法は使えません。どうしたらいいでしょうか(あなたがボランティアなら、どうしますか)

⑦設定した困難な場面を、静止状態の劇で表現、グループごとに発表して説明する。

⑧その困難が解決された場面をグループごとに静止状態の劇で表現する。

⑨困難場面と「解決」場面の間をつなぐ経過をグループごとにセリフ付き、動作付きで演劇で上演する。

⑩グループで振り返り、全体でお互いの演劇についての感想をだしあう。

・解決方法として一緒に飲む場面を表現したが、飲むことが目的ではなくて、本音を出し合ってじっくり話をするためのツールとして考えた。他の方法もあったらよい。

・最初があって最後があってその経過をどう考えるかだったが時間がなかった。時間をかけて考えることが重要。

・いろんな場面に遭遇した時、こういうプロセスで考えていると思った。問題場面を頭の中で想像して、どうしたらいいか、どうなったらいいかなということを考えて、そのためにどうやってそこへ持っていかうかということ普段の取り組みの中でもイメージしているのではないかな。あらためてやってみて、その参考になった。

・解決場面をどんなふう具体的にだしあうか、解決につながる手がかりが問題場面にすでに入れ込んであるかがポイントである。

〈第4分科会〉

テーマ 「外国にルーツのある子どもに必要な日本語学習の在り方」

参加者 25名

1) 高橋さんの発表は、外国にルーツのある子どもの教育ということで、副専攻プログラムが紹介された。系統的なカリキュラムを編成し、日本語指導が必要な児童生徒の指導担当教員の育成を目的としている。履修科目としては、20単位相当の学びになっていること、複数教員による指導が行われることによって、毎年内容が豊かになっていく幅広い教育につながっているという報告があった。

2) 櫛引さんからは、日本語教育関連の授業と学校体験研修についての報告があった。授業内容は、児童生徒だけではなく、日本語教育の学習者、指導者、指導法、あるいは教材・授業内容ごとのベストな内容を選択する能力の育成など広範囲に展開していること。また、学校体験学習では、外国にルーツのある子どもたちについて知ること、その子どもの実情を知った上で、学校内外の活動を含め、子どもたちの生活を幅広い空間の中で、位置づける、いろいろな場面における子どもの姿を見るということを目的としていること。多様な文化的背景を持つ子どもたちの実態を知るといった目的で授業を実施しているという報告があった。

3) 高橋さんからは、大阪市で暮らす外国にルーツのある子どもたちについての調査報告が行われた。大阪市で行われている支援の取り組みとしては、初期対応からプレクラス、日本語指導、教科指導の中で行われる日本語指導というふうに、それぞれの段階に応じた支援が行われるよう、市内4箇所共生支援拠点が設置されていることが説明された。その上で調査結果から、外国にルーツのある子ども達の実態として、全体としては日本語を母語とする子ども達と同様におおむね高い自己肯定感を持っていること、ただし母語児と比べると孤立感が高く、その傾向は渡日から間がない、支えとなる友だちや落ち着ける心の居場所を十分に持っていない子ども達に顕著であることが指摘された。また、外国にルーツのある子ども達は教科学習でも課題があり、そこには日常会話のレベルを超えた学習言語としての日本語支援の必要性があることが説明された。

4) 櫛引さんからは、「アプリで にほんご がっこうにいこう」についてアナログ教材とこのアプリを併用しているという事例の紹介があった。教員の負担軽減のためにこのアプリを開発したが、サバイバル期の児童生徒に向けての教材と位置づけている。このアプリの学習を通じてコミュニケーションツールとして対話を深める、といったアプリの活用方法について紹介があった。利点としては、アプリだとカスタマイズができること、方言の実情に即した内容にできること。そして学習の自動記録ができるということが挙げられる。しかし、課題としては、対象学年の拡大の必要性やアプリという点で指導者にとってのハードルが高くなっているということが挙げられた。

5) 最後に、4つのグループに分かれて、各自の自己紹介の後、高橋さん、櫛引さんに対する感想の交流を行った。交流での発言の中には、夜間学級で勉強しているけれども、アプリを使ってみたら、面白そうだという意見。学習で動画サイト見ながら学習者さんと学習をしているという学習方法の紹介。昔は紙の辞書を使って外国人の方と話していたけれ

ども、今はスマホで翻訳できるから非常に便利だし、仲良くなれるようになったこと。このアプリは、複数の子のそれぞれの進度に合わせてくれるということで、このアプリがとても有効に使えるそうだという意見交換がなされた。

以上